



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第16主日 A年(2023年7月23日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 12章13、16—19節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章26—27節

福音朗読：マタイによる福音書 13章24—30節(短い形式)

## 聞いて受け入れる人

三つの朗読から

福音朗読では三つのたとえ話が読まれます(毒麦のたとえ、からし種のたとえ、パン種のたとえ)。三つのたとえ話から共通してここに思い浮かべることができるイメージは「成長」です。「天国」「神の国」は、その人のところの中で成長していきます。最初はごくごく小さく、わずかなものであっても、必ず大きくなっていく。毒麦と混じりあってしまい、麦が見えなくなってしまっても、それでも必ず成長していきます。神の存在、神の想い、神の恵みといったものは人のところの中で豊かに成長していくのです。

第一朗読では、「すべてに心を配る神」、「すべてのものをいとおしむ方」と神さまの姿を言い当てています。神は日常生活の中で働かれる方です。その働きは、人間の一人ひとりを心配し、ところを配るという仕方しかたでなされるのです。

そんな神の姿を知っていれば、たとえ第二朗読にあるように「どう祈るべきかを知りません」と悲嘆ひたんに暮れる必要はありません。確かに日常生活には苦難くなんと困難こんなんが待ち構えています。それでも、一人ひとりにところを配る神は、人のところの深いところで「霊」として存在しておられます。そして「霊」ご自身も、苦しむわたしたちと共に苦しみつつ、「うめき」ながら、わたしたちを天におられる神の方へと向かわせてくれるのです。

福音朗読に注目してみましょう。『マタイによる福音書』13章の全体を眺めてみると、あるパターンが見えてきます。

① 1－23 節

- ① 種を蒔く人のたとえ (1－9 節)
- ② たとえを用いて話す理由 (10－17 節)
- ③ 種を蒔く人のたとえの説明 (18－23 節)

② 24－43 節

- ① 毒麦などの三つのたとえ (24－33 節)
- ② たとえを用いて語る (34－35 節)
- ③ 毒麦のたとえの説明 (36－43 節)

③ 44－52 節

- ① 天の国についての三つのたとえ (44－50 節)
- ② 天の国のことを学んだ学者 (51－52 節)

44－52 節の部分だけ、たとえの説明がありません。というのも、ここでは、たとえを語る相手は弟子たちだけです (36 節参照)。弟子たちは「天の国のことを学んだ学者」なのですから、もはやたとえ話の解説は必要としていないのです。

たとえの聞き手が変化していることに注目しましょう。「天の国の秘密」(11 節) を聞いて受け入れる人が「弟子」であり、受け入れない人は「群衆」となります。「イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ」たとありますから (34 節)、聞き手である「彼ら」(31 節) はたとえを理解できず、受け入れなかったので「群衆」のままで終わります。決して「弟子たち」(51 節) になることはありません。

13 章の最初の種蒔きのたとえでは明確ではありませんが、後のたとえは「天の国は次のようにたとえられる」と前置きして、テーマが天の国であることがはっきりとしています。しかし、毒麦のたとえ、からし種のたとえ、パン種のたとえはどれも天の国の実現のプロセスが描かれているのに対して、後の他のたとえは天の国が人にもたらされる結果が描かれています。

①の種蒔きのたとえでは、それを耳にする人は群衆でした。彼らは「聞くには聞くが決して理解しない」人たちでした。そして「あなたがたの耳はきいているから幸いだ」と弟子たちに語りかけて、聞くことに集中するようにと励まします。②のたとえでは群衆と弟子の対比はなくなり、イエスさまは群衆から離れて弟子たちにたとえの説明をしています (36－43 節)。そして③のたとえでは群衆の姿は消えてなくなります。弟子たちは「天の国のことを学んだ学者」と位置づけられています。こう見てみますと、13 章に登場する七つのたとえは、読み手を群衆に留まらせるのではなく、弟子になるようにと励まし、導くような配置となっていると考えてよいでしょう。